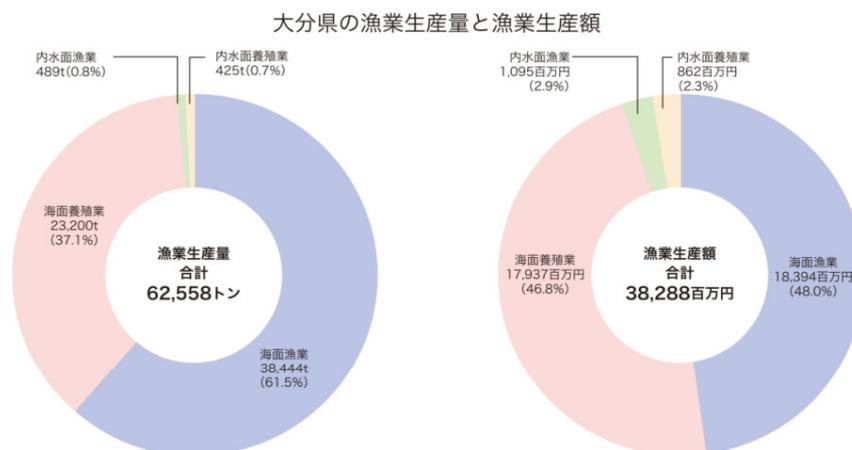


(1) 生産概況

平成21年の海面及び内水面の漁業・養殖生産量は62,558トンで、前年と比較して837トン(1.3%)減少しました。漁業・養殖業生産額は382億88百万円で、前年と比較して2億93百万円(0.8%)増加しました。

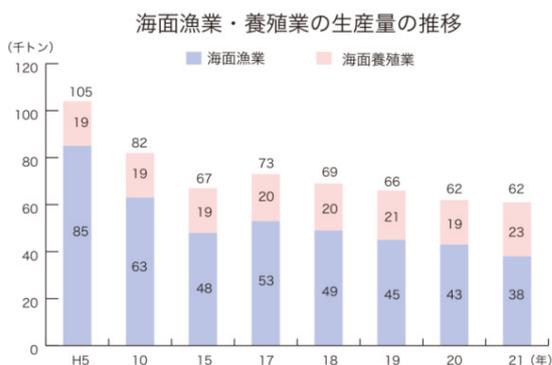


資料：農林統計、水産振興課

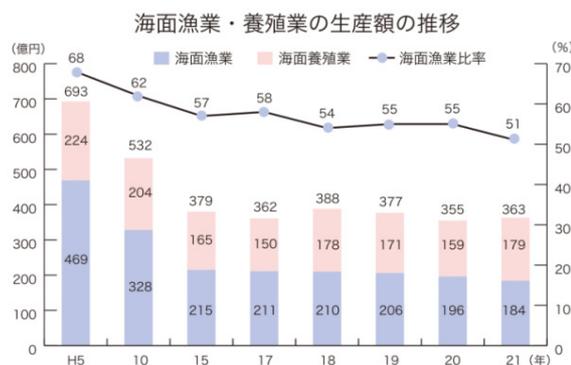
平成21年の海面漁業・養殖業生産量は6万1,644トンで、前年と比較して623トン(1.0%)減少しました。生産量はピーク時(昭和60年16万7,374t)の37%となっています。海面漁業では、イワシ類、タイ類等で増加したものの、マグロ・カジキ類、タチウオ、アジ類等で減少し、4,527トン減少しました。海面養殖業では、クルマエビで減少したものの、ブリ類、ヒラメ等で増加し、3,904トン増加しました。

海面漁業・養殖業生産額は363億31百万円で、前年より8億20百万円(2.3%)増加しました。海面漁業では、イワシ類等で増加したものの、マグロ・カジキ類、タチウオ等で減少し、11億95百万円減少しました。海面養殖業では、養殖ヒラメ、養殖クルマエビ等で減少したものの、養殖ブリ類で増加し、20億15百万円増加しました。また、生産額に占める海面漁業の割合は51%となりました。

海面漁業では昭和60年をピークにマイワシ及びアサリの急激な資源の悪化により、生産量が減少し、生産額も減少しています。海面養殖業は2万トン前後で生産量は推移しており、平成21年はヒラメの価格低迷等がありましたが、ブリ類の生産量向上により生産額は向上しました。



資料：農林統計



資料：農林統計

(1) 海面漁業・養殖業

本県の海岸線の総延長は772km（全国13位）で、日本三大干潟のひとつである豊前海からリアス式海岸の豊後水道まで変化に富んだ地形を有し、地域ごとに特徴のある漁業・養殖業が営まれています。

豊前海地域は3,100haに及ぶ広大な干潟域とその沖合の平坦な浅海域からなり、干潟域は採貝漁業やノリ養殖業の漁場であるとともに幼稚魚の育成場としての役割を果たしています。浅海域ではエビ類、カレイ類などを対象とする小型底びき網や刺網等の漁業が営まれています。

豊後灘・別府湾地域は、豊後水道からの魚類の回遊路にあたる国東半島周辺の豊後灘と深い内湾を形成する別府湾からなり、外洋水と内海水が混合する生産性の高い漁場を有し、小型底びき網、刺網やシラスなどを対象とする船びき網などの漁業やクルマエビ、カキ等の養殖業が営まれています。

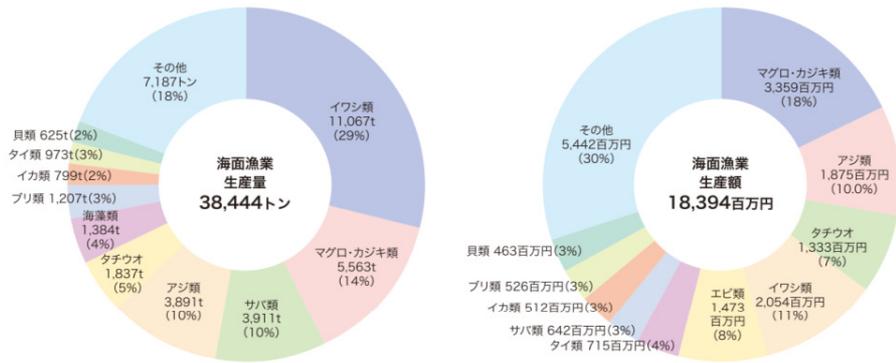
豊後水道北部、豊後水道南部地域は、変化に富んだリアス式海岸と天然礁に恵まれた生産性の高い漁場を有しており、このうち豊後水道北部では津久見市保戸島を根拠地として沖合・遠洋でのマグロはえ縄漁業が、沿岸域ではまき網やブリ、タイ、アジなどの中高級魚を対象とする一本釣りなどの漁業やブリ、真珠等の養殖業が営まれています。

豊後水道南部地域はアジ、サバ、イワシ等の多獲性魚類を対象とするまき網やマダイ、イサキ等の中高級魚を対象とする一本釣りなど様々な漁船漁業と、ブリ、ヒラメ、マダイ等の魚類養殖業、真珠、ヒオウギガイなどの貝類養殖業が営まれています。

(2) 海面漁業

平成21年の海面漁業を魚種別にみると、生産量はイワシ類が最も多く、次いでマグロ・カジキ類、サバ類、アジ類と続いており、これらの魚種で生産量全体の63.6%を占めています。生産額では、マグロ・カジキ類が最も多く、次いでイワシ類、アジ類、タチウオと続いており、これらの魚種で生産額全体の46.9%を占めています。

平成21年の海面漁業の魚種別生産量と生産額



資料：農林統計

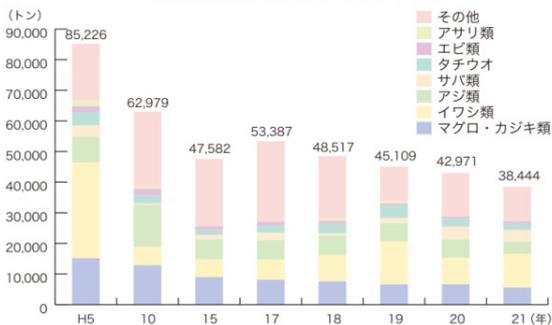
魚種別生産量の推移をみると、特にイワシ類の激減が漁業生産に深刻な影響を与えています。この他にもアサリ、タチウオ、エビ類等の減少が著しく、資源の回復が求められています。そこで藻場などの幼稚魚の育成場の造成に取り組んでいるほか、瀬戸内海のサワラ、豊前海のアサリ、周防灘の小型底びき網漁業対象種（カレイ類、ヒラメ、クルマエビ、ガザミ、シャコ）、豊後水道のクルマエビ、大分県全海域のタチウオについては、資源回復計画を策定し、禁漁期の設定など漁業規制の強化とあわせて、種苗放流などの支援を行う資源管理強化型漁業の実践によって資源の回復を図っています。

また、平成23年度からは国の資源管理・所得補償制度に基づき、資源管理の取組を実施していきます。

本県における資源回復計画

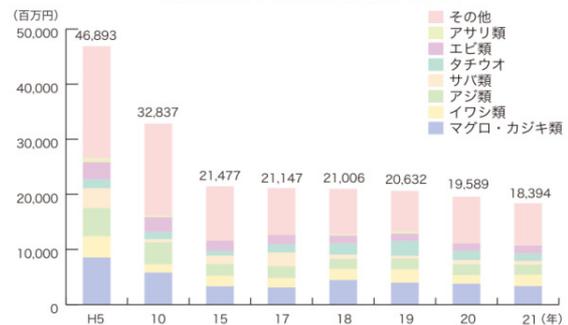
さわら瀬戸内海系群資源回復計画 平成14年4月12日 国策定
大分県豊前海アサリ資源回復計画 平成16年3月26日 県策定
周防灘小型機船底びき網漁業対象種 資源回復計画 平成16年11月19日 国策定
大分県豊後水道域クルマエビ資源回復計画 平成17年8月4日 県策定
大分県タチウオ資源回復計画 平成21年3月30日 県策定

海面漁業の魚種別生産量の推移



資料：農林統計

海面漁業の魚種別生産額の推移



資料：農林統計

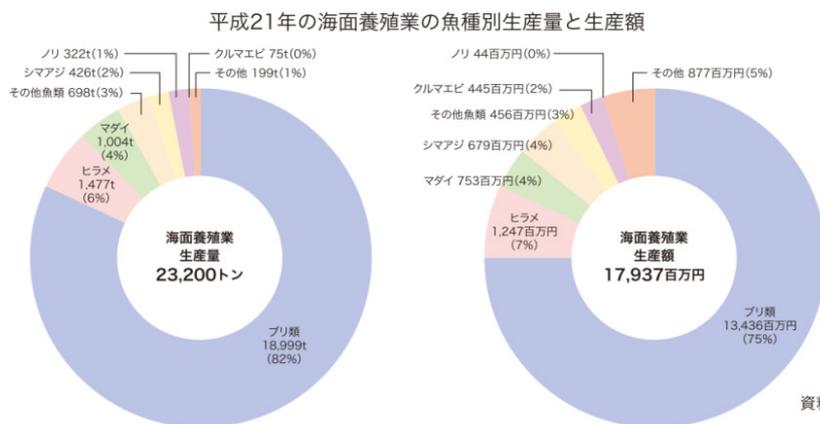
「おおいた農山漁村活性化戦略 2005」における目標指標

目標指標名	H15(基準年)	H21実績	H22実績(見込)	H22中間年目標	H27最終年目標
資源回復計画策定魚種数(魚種)	2	10	10	11	15
漁業会社における魚類の平均種苗生産効率(尾/㎡)	1,157	1,343	1,501	1,560	1,840

(3) 海面養殖業

平成21年の海面養殖業を魚種別にみると、生産量はブリ類が81.9%で大半を占め、次いでヒラメ、マダイ、その他魚類と続いており、この他にもクルマエビ、真珠、ノリ類などの養殖が行われています。生産額でもブリ類が74.9%で大半を占め、次いでヒラメ、マダイ、シマアジ、クルマエビその他魚類と続いています。

このように、本県海面養殖業の大部分はブリ類を主とした魚類養殖であり、生産量の97.4%、生産額の93.8%を占めています。近年の生産量の推移をみると、養殖業全体では2万トン前後で安定しており、21年はブリ類の生産量が増加したため、海面養殖業全体の生産額は向上しましたが、ヒラメの生産額は低下しました。



ブリ類の養殖業は本県海面養殖生産額の約75%を占めていますが、近年は餌の高騰や単価の低迷など厳しい経営を強いられています。

そのため、県は制度資金の利子補給の上乗せ助成や、魚粉代替飼料開発の研究、新養殖魚種の導入を進めるなど養殖業者の経営安定対策等を行っています。

また、カボス添加飼料を用いることにより養殖ブリや養殖ヒラメの品質向上に向けた取組みを実施しています。



カボス添加飼料により
高品質・付加価値を目指す養殖ブリ

